

合意形成のための思考を促す学級活動の指導の工夫 — 「合意形成ステップシート」を活用した学級会の取組を通して —

呉市立港町小学校 陰 菜穂子

研究の要約

本研究は、「合意形成ステップシート」を活用した学級会の取組を通して、合意形成のための思考を促す学級活動の指導の工夫について考察したものである。文献研究から、合意形成のための思考を促す学級活動とは、一人でも多くの人が納得できるように、話し合いの過程において、出し合った意見をくらべ、関連付け、それぞれの考え固有の価値や問題点を考察したり、解決策を考えたりする等の関わり合いを通して、みんなにとってよい考えを再構成することであると分かった。そこで、収束的、収斂的思考を促すためのワークシートである「合意形成ステップシート」を作成し、価値や問題点を個々が整理した上で、話し合いに参加できるようにした。その結果、多面的・多角的に考え、相手の立場に立って問題解決策を見だし、合意を図ることができた。このことから、「合意形成ステップシート」を活用した学級会を形成することは、合意形成のための思考を促すことに有効であるといえる。

キーワード：合意形成 「合意形成ステップシート」 関わり合い

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年）には、特別活動で育てる資質として、「(2)集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。」¹⁾ことが挙げられている。

所属校の平成28年度全国学力・学習状況調査における「学級会などの話し合い活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている」の肯定的回答の割合は37.1%で、広島県平均の58.0%を下回っている。児童の話し合い活動の実態では、立場が異なる意見を検討せずに、安易に多数派の意見に流される傾向がある。出された意見について、一度個人で再思考させ、多面的・多角的に捉えさせた上で、関わり合わせる指導が不十分であったため、違いや少数意見のよさを生かした合意形成が図れていなかったと考えられる。

堀裕嗣(2012)は、議論を活性化させるためには、まず、課題に対し個人で思考し、それを書く過程が重要であると述べている。そこで、本研究では、再思考の手立てとして、「合意形成ステップシート」を取り入れ、児童がそれぞれの意見の実行性を考え、長所と短所をシートに書き出し、価値や

問題点を整理した上で、意見をくらべ合いながら、話し合いに参加できるようにする。また、宮川八岐(2012)は、話し合い活動は自分もよくみんなもよいと思えることを折り合いをつけて決めるためのものであると述べている。「合意形成ステップシート」に整理したことを基に、異なる立場の者同士が歩み寄れるような相互理解が深まる働きかけをしながら、みんなが納得できる問題解決策を見いだそうと話し合っていくことで、合意形成を図ることができると思う。

このように、「合意形成ステップシート」を活用して、個人で再思考し、関わり合い、互いの思考を促すことで、合意形成につながると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 合意形成とは

石川一喜・小貫仁(2015)は、「合意」とは、過程に対して納得することであり、様々な人の価値観、意見、意志がある中で、それらをすり合わせて、形を成していくことであると述べている。

文部科学省／国立教育政策研究所教育課程センター(2016)は、合意形成について、互いの意見の

違いを超えたり、よさを生かしたりしながら最終的に「自分もよくてみんなもよい」集団としての意見をまとめることであると示している。

これらのことから、合意形成とは、相手の立場や考え方を互いに理解し、それらのよさを生かしながら、合意の過程に納得した上で、集団としての意見をまとめていくことであると捉える。

2 合意形成のための思考とは

波頭亮（2004）は、思考とは「事象の識別」を行い、「事象間の関係性の把握」をして、それらを組み合わせていくことであると示し、正しい識別を行うには、比較をして、そのものらしさを端的に表す違いを認識することが必要であると述べている。

田村学（2013）は、思考とは、収集した情報を再構成し、そこに関係や傾向を見いだすこと、つまり、他の児童の発言などから得た情報を再構成するプロセスが「思考」、その結果として生成するプロダクトが「考え」と述べている。さらに、「考え」を生み出すプロセスとしての「思考」を自覚的に、しかも適切に行われるような能力を思考力と捉えることができると示している。

杉田洋（2009）は、特別活動においては、限られた時間の範囲の中で、合意形成のために、互いに知恵を出し合い、一人でも多くの人々が納得したり、一人でも多くの人々の考えが生かされたりして、答えを見付けることが大切であると述べている。

さらに、南本長穂（2010）は、思考の性質に着眼することで、効果的な話し合いが期待できると述べ、思考の性質には、表1に示すように、考えを出し合い、集める「発散的思考」、考えをまとめ、束ねる「収束的思考」、正しい考えを突きとめ、求める「収斂的思考」の三つがあるとしている。所属校の児童の実態を踏まえ、本研究では、収束的、収斂的思考に焦点化する。

表1 南本による話し合いにおける三つの思考の性質

発散的思考	<ul style="list-style-type: none"> 自分では、なかなか思いつかないような他の人の考えや情報への気付き 他の人の考えに触発され、それを手掛かりに自らも少し違った考えの発想
収束的思考	<ul style="list-style-type: none"> 出された多くの考えや情報を、比較、関連付け、取捨選択 出された多くの考えや情報の共通点・相違点の分析と集約 他の人と自分の考えとの関係性の考察
収斂的思考	<ul style="list-style-type: none"> 解答をはっきりさせ、納得できない者への納得できるまでの説明

以上のことから、合意形成のための思考とは、一人でも多くの人々が納得できるように、話し合いの過程において、出し合った意見をくらべて、関連付け、それぞれの考え固有の価値や問題点を考察したり、解決策を考えたりする中で、みんなにとってよい考えを再構成することと捉えることができる。また、それらの思考を児童が自覚的に行うような学級活動にしていく必要があると考える。

3 合意形成のための思考を促す学級活動にするために

(1) 学級活動（1）における話し合い活動について

宮川（2012）は、学級活動（1）において、互いの思いや願いを理解することに努め、知恵を出し合い、合意点を見いだす集団討議をするのが話し合い活動、つまり、学級会の使命であると述べている。

教育課程企画特別部会論点整理（平成27年）では、意見の違いや多様性を生かしつつ集団としての意見をまとめていく話し合い活動などは、社会参画の意識や合意形成のための思考力・判断力・表現力等を養うものであると述べられている。

これらのことから、学級活動（1）における話し合い活動では、児童が、互いの思いや願いを理解し合ったり、合意点を見いだすために知恵を出し合ったりするなどの合意形成のための思考ができる話し合い活動にしなければならないと考える。

(2) 合意形成のための思考を促す話し合い活動にするために

橋本定男（2013）は、話し合い活動は「盛り上がり」ではなく、「深まり」が大切であると述べている。つまり、その学級会の時間内において、次々と意見が出された拡散した状態から、その先の収束段階に子供たちが入り、納得のある合意を作り出すことができるかであり、「深まり」とは、子供たちが意見の違いを乗り越え、折り合いのつけ所を探そうとするか、自分の主張にこだわらず、互いに聴き合い、分かり合いを自覚した動きを見せるかなどの姿を具現することであると述べている。

有村久春（2003）は、話し合い活動には、集団による漸進的な思考があり、話し合いのプロセスを前後しながらその集団の思考を深めていくものであると述べている。さらに、そこには、問題解決に必要な情報提供、話し合いの基本的な技術等、教師の適切な指導・援助なども必要であると述べている。

杉田（2009）は、人間にはそれぞれ多様な価値

観や考え方があり、その違いや多様性が大きく広がる中で、今後はこれらの違いや多様性を引き出す指導を重視して、それらを認め合い、生かし合いながら合意形成を図らなければならないと述べている。

以上のことから、合意形成のための思考を促す学級活動とは、問題解決のための話し合い活動を通して、違いや多様性を引き出すなどの発散的思考から、収束的思考により意見を深めさせ、収束的思考により合意形成を図る活動であり、そのためには、話し合いの技術の指導や、考えを見直したり、比較・検討したりする場の設定等、教師の適切な指導・援助が必要であると考えられる。

4 合意形成のための思考を促す学級活動の指導の工夫

(1) 「合意形成ステップシート」について

橋本（2013）は、深まりが期待できる「対話型学級会」にするための改善点として①拡散から収束への局面転換は、話し合いの軸をぶれなくさせるために、教師が論点を整理すること②違いを大切にしつつ、やり方を工夫し、折り合いをつけられないかと意見をすり合わせさせること③自身の意見を主張し、相手に反駁するだけに終わらずにお互いの意見を聴き合い、分かり合うことを大切にさせるための発言の仕方を助言したり、そのための時間を作ったりすることの3点を挙げている。このことから、稿者は、収束的思考へと促すために、出された意見の

論点を整理した後、書く活動を設定し、それらの長所や短所、解決策などについて、多面的・多角的に再思考させる時間を話し合い活動に取り入れる。

図1に示す「合意形成ステップシート」は、収束的思考と収束的思考の場面で、個人で再思考するためのワークシートである。収束的思考の場面で、賛成・反対に関わらず、それぞれの考えについて、事柄の実行性を考えながら、価値や問題点・心配な点を多面的・多角的に考えて右欄に記述する。また、問題点や心配な点をどうすれば解決できるのかを書く欄を設けることで、問題解決型思考を促すこともできると考える。それらの考えを全体で交流して、他の人から得た情報を基に、活動の目的に合ったよりよい内容や方法を再構成するための欄が左側である。「自分だけがよい」「あなただけがよい」から、「みんながよい」と思える解決策はどうあるべきか、シートに「みんな」という言葉を示すことで、その転換点を可視化している。このように、「合意形成ステップシート」に自分の考えを書く時間を設け、すべての児童に思考する機会を確保することで、考えを明確にして合意形成に関わることができる。さらに、このシートを有効に活用して合意形成を図るためには、意見を関わり合わせる過程が大切であると考えられる。

(2) 「合意形成ステップシート」を活用する学級会にするために

杉田（2013）は、話し合い活動において、合意形

図1 「合意形成ステップシート」

- ・それぞれの考えの違いやよさをくらべやすくするために、「似た意見をまとめる」「いくつかに分類してみる」などの考え方
- ・建設的な話し合いにするために、「相手の意見を尊重した言い方」「ただ反対でなく問題点を指摘して改善を求める」「折り合うためには少し譲って、相手の意見を取り入れる」などの考え方
- ・多様な意見を生かす話し合いにするために「それぞれのいいところを合わせる」「指摘された問題について改善点を示す」「絶対賛成ではなくても条件付きで賛成する」「両方のいいところを取り出して、新しい考えを生み出す」などの考え方や判断の仕方

図2 杉田による合意形成のための「思考力・判断力・実践力」を育てるための考え方

成のための「思考力・判断力・実践力」を育てるために、図2のような考え方についての指導や助言が大切であると示している。収束的・収斂的思考の場面で、「合意形成ステップシート」に整理されたことを、図2に示す考え方で、互いの意見を関わらせながら合意形成をする必要があると考える。そのための45分間の話し合い活動の過程を図3に構想図として示す。「合意形成ステップシート」に沿った、教師が指導すべき、司会者の進行の言葉と、図2の考え方による合意形成のための言葉を下段に示してい

る。児童には、下段を基に作成した、発達段階に応じた話し合いの手引を持たせ、全体で意見を交流させていく。また、中段には、話し合い活動のどの場面で、「合意形成ステップシート」に考えを書き、再思考をするのかを板書の流れと併せて示している。話し合いが深まらなかった場合は、上段の話し合いのプロセスのどこが不十分であったのか等、検証、評価することもできる。また、この構想図を基に、計画委員会で、司会や記録者に話し合いの見通しをもたせる。同時に、合意形成とは何か、そのためにどのような考え方や方法で話し合っていくのかについて、事前に学級全体で共通理解を図り、自己のめあてをもつ場面を設定する必要があると考える。

(3) 学級活動（2）で共通理解を図ることについて

文部科学省／国立教育政策研究所教育課程センター（平成26年）は、学級活動（2）について、学級活動（2）の授業では、教師が、児童の問題意識を高め、適切な情報を提供しながら、児童が自分に合った具体的なめあてや方法を自己決定できるようにすると示している。そこで、学級活動（2）の共通事項「ウ 望ましい人間関係の形成」の学習で、相手の立場に立って考え、よりよい問題解決をするための考え方を理解したり、「ア 希望や目標をもって生きる態度の育成」で、学級会オリエンテー



図3 「合意形成ステップシート」を活用した話し合い活動（1単位時間）の構想図

ションを行い、合意形成までの過程を体験したりする。これまでの話し合い活動の課題を提示し、問題意識を高めた上で、誰が司会になっても、合意形成のための働きかけができるように、グループごとに、司会役、発言者役を順番に行い、合意形成までの過程を体験を通して実感させたい。このように、学級活動（２）の学習を通して、教師が意図的に、学級や学校での生活をよりよくするための話し合いの進め方やよりよい合意形成の図り方について指導することを通して、学級全体が合意形成について共通理解をすることができると考える。

Ⅲ 研究の仮説及び検証の視点と方法

１ 研究の仮説

「合意形成ステップシート」を用いて物事を多面的・多角的に見たり、解決方法を考えたりした上で、それらの考えを関わらせる話し合い活動をすれば、合意形成のための思考が促されるであろう。

２ 検証の視点と方法

検証の視点と方法について、表２に示す。

表２ 検証の視点と方法

検証の視点	検証の方法
○ 「合意形成ステップシート」を活用した話し合い活動が有効であったか。	○ 「合意形成ステップシート」の分析・考察
１ 出された考えについて、価値や問題点をくらべ、問題解決策を考えることができたか。	○ 授業記録の分析・考察
２ 「合意形成ステップシート」を用いて意見を関わり合わせることができたか。	○ 事前・事後アンケートの分析・考察
３ 活動の目的に合ったよりよい内容や方法について考えを再構成することができたか。	

Ⅳ 研究授業について

１ 研究授業の内容

- 期 間 平成29年 6 月23日～平成29年 7 月 7 日
- 対 象 所属校第2学年（2学級39人）

２ 研究授業の概要

研究授業の概要を、表３に示す。

表３ 研究授業の概要

授業内容	学級活動（２）		学級活動（１）	
	第１時	第２時	第３時	第４時
合意形成	日常生活の様々な場面で合意形成をする場面があることに気付く、多面的・多角的に物事を考え、問題解決をしていくことが大切であることを理解する。	「合意形成ステップシート」を使った学級会の進め方について体験を通して理解する。	「合意形成ステップシート」を活用して、集団討議による合意形成を図る。	合意形成をしたことを基に、全員で協力して決めたことを実践する。また、合意したことに対する自分の関わりについて振り返る。
題材議題	「相手の立場になって考えよう」（ウ 望ましい人間関係の形成）	「学級会パワーアップ作戦！自分もよくみんなもよい集団決定をしよう」（ア 希望や目標をもって生きる態度の形成）	「１学期スマイル学年集会のゲームを考えよう」（話し合い活動）	「１学期スマイル学年集会を開こう」（事後の活動）
ねらい	自分とは異なる立場の考えを理解したり、物事をいろいろな面から考えたりして、よりよい問題解決をするためにはどうすればよいのかを理解する。	他人の立場を認めたり、理解しようとしたりしながら折り合いをつけて合意形成をするよさに気付く、問題解決に向けた話し合いをすることができる。	自分とは異なる立場の考えを理解したり、物事をいろいろな面から考えたりして、自分もみんなもよい遊びを決めることができる。	集会の目的を考え、友だちと仲良く活動したり、１学期のお互いの頑張りを認め合ったりすることができる。
授業の展開	１ アンケートを基に、意見がぶつかるときに納得できていない人がいることに気付く。 ２ なぜ、うまく意見がまとまらないのか原因を考える。 ３ どうすれば、自分もよく、相手もよい解決策を見付けることができるのかみんなで話し合う。 ４ 自分の課題に合っためあてを決める。 ５ 互いに自分の努力するところを発表し合う。	１ アンケートを基に、話し合い活動の学級の課題を把握する。 ２ 課題の原因について、司会側と発言者側の視点から考える。 ３ 「合意形成ステップシート」を用いた学級会の進め方を理解する。 ４ 「合意形成ステップシート」を使ってグループごとに「ミニ学級会」を行う。 ５ 「ミニ学級会」の振り返りをし、自分の努力するところを決め、発表し合う。	１ 始めの言葉 ２ 計画委員の紹介 ３ 議題の確認 ４ 提案理由、めあて、決まっていることの確認 ５ 話し合い 柱１「何の遊びにするか」 柱２「どんな工夫をするか」 柱３「係はどうするか」 ６ 決まったことの発表 ７ 話し合いの振り返り ８ 先生の話 ９ 終わりの言葉	１ 始めの言葉でめあてを確認する。 ２ 話し合い活動で決まった遊びをする。 ３ 話し合い活動で出された「心配意見」をもとに考えられたオリジナルルールの説明をする。 ４ １学期に頑張ったことをそれぞれ発表する。 ５ 集会活動の振り返りを振り返りカードに書き、発表する。 ６ 終わりの言葉

3 研究授業の実際

(1) 学級活動(2)の学習の実際

第1時では、日常の生活場面から、意見が対立した場面を想定し、自分の立場だけでなく相手の立場にも立ち、多面的・多角的な意見を出し合わせながら合意形成の必要性について考えさせていった。

図4は、児童から出された意見の板書である。

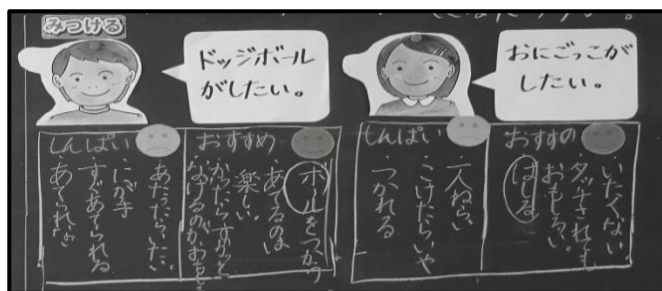


図4 児童から出された意見の板書

長所・短所から固有の価値や問題点を児童と共に整理することで、違いや共通点に気付かせていった。さらに、「二人が納得して、遊びを決めるにはどうしたらいいか」と相手の立場に立って考えさせることで、児童から、次のような合意形成のための考え方を導き出すことができた。

- ・また次作戦（大休憩はドッジボール、屋休憩は鬼ごっこをする。）
- ・まぜまぜ作戦（二つのよい所を合わせて「あてっち」をする。）
- ・半分ずつ作戦（10分ずつ二つの遊びをする。）
- ・ちがうこと作戦（思い切って別の遊びをする。）
- ・オリジナル作戦（二つの考えを合わせて、新ルールで遊びを作る。）

児童が考えた「合意形成作戦」

第2時では、「合意形成ステップシート」を用いて、実際に小グループで「学級会オリエンテーション」として合意形成までのプロセスを体験した。その際に、図3で示した言語技術を、収束的・収斂的思考を促すための話合いの手引として児童全員に持たせた。司会役の児童は、「合意形成ステップシート」に沿った話合いの進行だけでなく、相手の意見を尊重するために、「よい意見をありがとうございます」という言葉を相手の発言に合わせて用いながら、合意形成までの過程を体験した。

これらの学習を通して、児童は、合意形成や、「合意形成ステップシート」に沿った話合い活動の流れについて理解し、「友だちの意見を聞いて、友だちの気持ちを分かってあげる」「自分も、みんなもよいように考える」等、次時の話合い活動のめあてを決めることができた。

(2) 学級活動(1)の学習の実際

第3時の話合い活動で、1組では、「ドッジボール」「鬼ごっこ」「あてっち」の中からどの遊びにするのか、2組では、「手つなぎ鬼」「こおり鬼」「しっぽとり」の中から、どの鬼ごっこにするのかについて、それぞれの学級で話し合った。第1時で、児童が「合意形成作戦」として考えたものを、絵カードの一覧にして手元に持たせた。児童は、合意形成の絵カードと話合いの手引と「合意形成ステップシート」の三つを、思考の手助けとして持ち、話合いに参加した。また、くらべ合う場面では、児童の意見をシートと同じ配列で板書に残した。それぞれの遊び固有の価値や問題点を見いだすことが難しかったため、教師が、板書を用いて、それぞれの長所・短所の違いに気付かせた後に、児童に、解決策やよさを生かし合うための策を考えさせた。児童は、他の児童が出した心配意見に対する解決策をシートを用いて再思考した後、全体で交流し合意形成に至った。「合意形成ステップシート」の右欄を取り入れた話合い活動の板書を図5に示す。

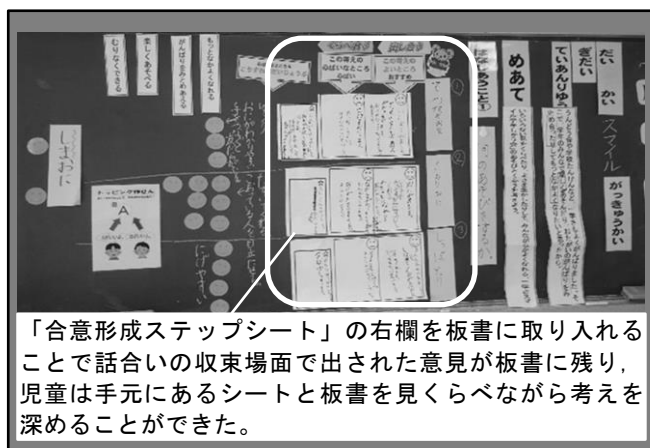


図5 「合意形成ステップシート」の右欄を取り入れた話合い活動の板書

V 研究授業の分析と考察

「合意形成ステップシート」を活用した話合い活動が有効であったかについて、次の視点に沿って分析を行った。

1 出された考えについて、価値や問題点をくらべ、問題解決策を考えることができたか

次頁図6に多面的・多角的思考についての事前・事後アンケートの結果を示す。次頁表4、表5には、それぞれの考えの価値と問題点についての

「合意形成ステップシート」の児童の記述を示す。

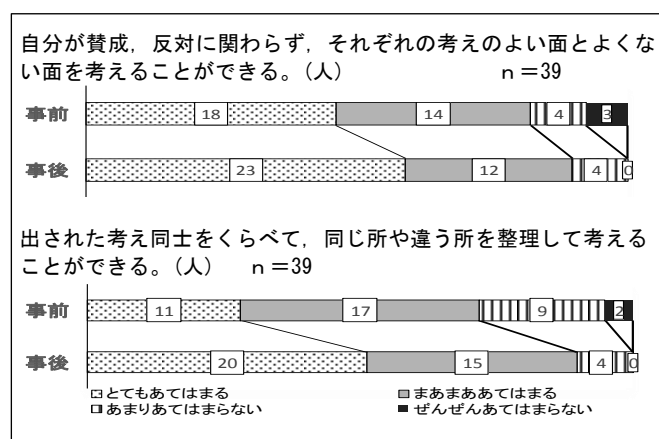


図6 事前・事後アンケートの結果（多面的・多角的思考）

表4 価値についての記述

	手つなぎ鬼	こおり鬼	しっぽとり
児童A	四人になったら二人ずつになるのが楽しい。	かたまっても、仲間にタッチされたらまた動けるのが楽しい。	休憩時間になかなかできないから。
児童B	手をつなぐと友だちになれる。	友だちが助けてくれる。	しっぽを取るのが楽しい。

表5 問題点についての記述

	手つなぎ鬼	こおり鬼	しっぽとり
児童C	こけたら、手をつないでいる人もこける。	仲間にタッチされても、見張りの鬼がすぐにタッチしてきて楽しくない。	しっぽを取られたらすぐに終わってしまう。
児童D	鬼の中で手を離す人がいる。	凍ったらみんながタッチしてくれなかったら暇になる。	しっぽを取るときにこけそうになる。

図6の結果から、肯定的に回答した児童の人数が増えており、授業前と授業後では、多面的・多角的思考に対する児童の意識に高まりが見られる。これまでの話し合い活動では、それぞれの意見の違いが不明確なまま、「自分がやりたいから」という理由で話し合いが進んでいたが、「賛成、反対に関わらず、よいことや心配なことについて考えましょう」と司会が呼びかけ、「合意形成ステップシート」に考えを書くための個人思考の時間を確保することで、同じ「鬼遊び」であっても、表4、表5に示したような違いを考えさせることができた。「合意形成ステップシート」の特長を生かし、シートを縦の関係で見て、意見の違いを認識したり、横の関係で見て、一つの考えに対して価値と問題点を両面から考えたりするなど、多面的・多角的に考察でき、収束的思考を促すことにつながったと考える。

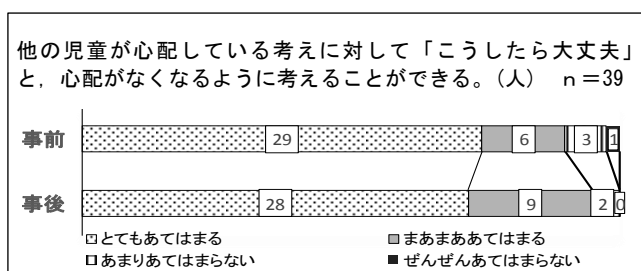


図7 事前・事後アンケートの結果（問題解決型思考）

図7に、問題解決型思考についての事前・事後アンケートの結果を示す。肯定的に回答した児童の人数が増えており、児童の意識に高まりが見られる。どの児童も、心配な点に対する解決策を記述することができ、「ドッジボールで、ボールが苦手な人がいるならば柔らかいボールを使う」「こおり鬼で凍った人がみんなに気付いてもらえないなら目立つポーズをする」等の記述が見られた。問題点について十分に意見を出し合い、他の児童の心配な気持ちに共感する場面を、話し合い活動の中に意図的に作ることで、相手の立場に立って考え、どうすればその心配を無くせるかという問題解決型の思考が促されたと考える。

2 「合意形成ステップシート」を用いて意見を関わり合わせることができたか

これまでの話し合い活動では、決まった児童が何度も発表することが多かったが、「合意形成ステップシート」に、予め自分の意見を書いておくことで、様々な児童が自信をもって発表することができた。どの意見についても長所・短所が挙がり、多様な意見に触れることができたが、それぞれの児童の発言が繋がっておらず、「関わり合い」という点では課題が残る。教師が、話し合いのどこを深めさせたいのかという指導の意図をもち、「合意形成ステップシート」に考えを整理する時間と話し合いの時間の配分を司会者に助言する必要がある。また、事前の活動である計画委員会の段階で、話し合いの流れの見通しを司会者に十分にもたせることができなかったため、司会者が、話し合いの手引の言葉を「自分の言葉」として用いることができなかった。発言者に対しては、「学級会オリエンテーション」で、経験知を理由にして話すといった意見の述べ方の指導も必要であったと考える。立場の違う者同士が互いに質問したり、自分の経験と結び付けて意見交換をしたりする時間を十分に確保できたら、さらに、「深まり」のある話し合いになり、話し合いの過程に納

得した上での合意形成になり得たと考える。

3 活動の目的に合ったよりよい内容や方法について考えを再構成することができたか

図8に、収斂的思考についての事前・事後アンケートの結果を示す。

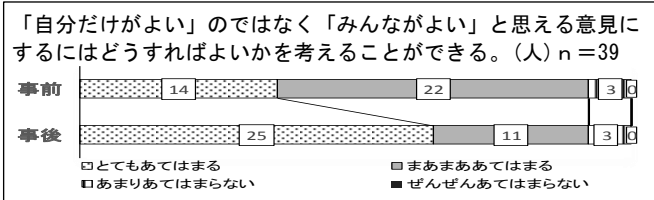


図8 事前・事後アンケートの結果（収斂的思考）

図8の結果では、「とてもあてはまる」と回答した児童が、11人増加した。黒板やワークシートに、「みんなが」という言葉を示したり、児童が考えた合意形成作戦を使ったり、「心配意見」に対する解決策を考えたりすることで、次に示すような「みんながよい考えはどれなのか」と考えることができた。

- ・みんなによい考えは「手つなぎ鬼」という考えです。わけは手をつなぐと、友だちがもっと増えるかもしれないからです。
- ・みんなにとってよい考えは「こおり鬼」という考えです。わけは、こおっても友だちが助けてくれるからです。心配意見や反対意見に対して、こおっている友だちを目立たせるという解決策を考えました。

「合意形成ステップシート」の左欄の記述

事後の活動では、決まった遊びについて、出された心配意見を基に「みんながよい」と感じられるルールや工夫について、ゲーム係で話し合った。その時に、個々の考えが記述されている「合意形成ステップシート」を活用し、話し合いでは出されなかった少数意見も参考にすることができた。表6にその内容を示す。

表6 心配意見を基にしたルールの工夫

決まった遊び	心配意見	ルールの工夫
ドッジボール	ボールがこわくて楽しめない人がある。	・柔らかいボールを使う。 ・男女別で行うが、勝敗は男女合わせた外野の人数で決める。
こおり鬼	凍ったまま気付いてもくたされず、さみしい人がある。 ずっと走っているのが疲れる人がある。	片手を上げるなど目立つポーズをする。 島鬼のように休憩できる場所を作る。

「合意形成ステップシート」を活用した学級会の事後の活動では、「話し合ったことをみんなでやってみて楽しかったですか」の質問項目に39人中38人の児童が肯定的回答をしている。また、「話し合った時には反対意見を言ったけど、楽しかった」「話し合いをしたら、けんかもなく、仲良くできたのがいいと思った」等の記述から、合意形成した内容に対して、児童が満足感を得られたことが分かった。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

「合意形成ステップシート」は、物事を多面的・多角的に見たり、解決方法を考えたりしながら、合意形成のための思考を促すには有効であることが分かった。

2 研究の課題

本研究では、お互いの意見を聴き合い、分かり合おうとする「深まり」のある話し合い活動には至らなかった。話し合いを深めるために、話し合い活動の中で、シートに書かれた考えを基に、他の児童と意見交換をしたり、相手の思いをもっと詳しく尋ねてみたりするような「関わり合い」のある場面を設定していく必要があると考える。そのために、シートのどの部分を中心に扱い、どこに論点をおいて話し合わせるのかについて、発達段階に応じて整理し、今後も本研究を継続して、合意形成のための思考を促す学級活動について追究していく。

【引用文献】

1) 文部科学省（平成29年）：『小学校学習指導要領』p.164

【参考文献】

堀裕嗣（2012）：『教室ファシリテーション10のアイテム100のステップ』学事出版
宮川八岐（2012）：『改訂版 やき先生の特別活動講座 学級会で子どもを育てる』文溪堂
石川一喜・小貫仁（2015）：『教育ファシリテーターになろう！』弘文堂
杉田洋（2009）：『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化社
相原次男・新富康央・南本長穂（2010）：『新しい時代の特別活動』ミネルヴァ書房
田中智志・橋本美保・犬塚文雄（2013）：『特別活動論』一藝社
有村久春（2003）：『キーワードで学ぶ特別活動生徒指導・教育相談』金子書房